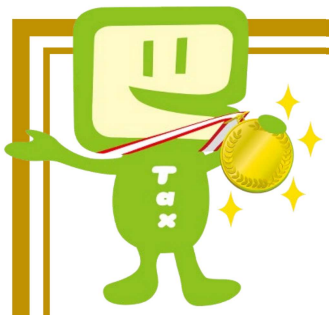


大阪国税局長賞

税のあり方と夢

和歌山県立新宮高等学校　１年　嶋　一花

私には将来、養護教諭になりたいという夢がある。学校の保健室で生徒たちの心と体の傷に寄り添い、安心できる場所を作りたいと考えているからだ。

しかし、私の家庭はシングルマザーで、兄は私立の大学に通っている。毎日のように仕事や家事を懸命にこなす母を見ていると、大学進学を目指している自分自身にどこか罪悪感が湧いてきてしまう。本当はお金の心配をせずに大学へ進学したい。もし私が国や自治体の税金の使い道を自由に決められるのなら、迷わず「ひとり親家庭への大学進学支援」や「教育環境の充実」に投入するだろう。

生まれた家庭の経済状況によって、目指せる未来や職業の選択肢に差がついてしまうのはとても悔しいことだ。意欲や夢があるのにお金を理由に諦めざるを得ない若者が増えることは、本人にとってもこれからの社会全体にとっても大きな損失のはずだ。だからこそ、税金を使って誰もが平等に夢を目指せるチャンスを保障してほしいと、私は切実に願っていた。

しかし、税金について詳しく調べていくうちに、私は社会の仕組みの奥深さに気づかされた。国や自治体も、この格差に対して何も対策していないわけではなかったのだ。所得に応じた授業料の減免制度や給付型奨学金など、私のような境遇の生徒を救うための仕組みは、すでに多くの税金で作られていた。また、私が今こうして安心して暮らせているのも、高校に通えているのも、保健室にある医薬品も、すべて誰かが納めてくれた税金で賄われている。私はこれまで、税金は買い物のたびにとられる自分にはあまり関係のないものだとばかり思っていた。けれど実際は、見知らぬ誰かの税金が私と家族の生活を、そして私の夢の土台を、ずっと底から支えてくれていたのだ。

税金は、単に国がお金を集めて消費するだけのシステムであってはならない。社会全体で「お互いを支え合うための優しさの循環」であるべきだと思う。

一方的に国から施しを受けるだけでは、この格差問題の本質的な解決にはならない。だからこそ、私は今ある支援制度を「助けられた」で終わらせず、夢を叶えて養護教諭になる。そして将来は、学校で子どもたちを助けるだけでなく、私自身が社会に出てしっかりと働き、次の世代の夢を叶える納税者になりたい。私が誰かの税金に未来をつないでもらったように、今度は私の納める税金が、誰かを照らす光になる。その「当事者としてのリレー」が続いていくことが真の税のあり方だと信じている。